博士論文要旨

論文題名：竹内好の向きあった中国と文学
―戦中戦後の日記から読む―

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
ヨ　イエン
YU　Yiyan

本論文は、文学に従事する竹内好が日本と中国の間を往来する軌跡を分析するものであり、竹内の日記を重視し、日記と著作物を検討することで、竹内の特異な体験と彼の文学に対する認識の変化の関係を明らかにしようと試みた。

第一章では、竹内好の文学観の形成を考察するため、竹内の北京留学を研究した。彼が文学に従事し、文学を放棄し、最終的にまた文学へ戻る思考の過程を検討した。竹内の留学前の文学観は、当時の日本の文壇文学に見られた、社会から乖離した「文壇」作家のもつエリート意識を重んじた。留学中、文壇文学の特徴を持っている北京の文学を発見できなかった竹内の心情は、期待から絶望へと変わった。しかし、竹内は個人的な恋愛体験を経て、エリート意識による自分の優越感を捨て、北京の社会において辛酸をなめる一般の民衆の生活を発見し、それを愛することができるようになった。その苦悩を経た竹内は成長し、文学と社会における民衆の生活との結合を重視した。

続く第二章、第三章及び第四章では、竹内好と彼の友人、知人たちの著作物との関連性を研究した。竹内の友人、知人には、日本人の作家であると同時に、中国に対して深い関心を寄せた者として、小田嶽夫と武田泰淳、中野重治の三人がいた。

第二章では、竹内好の『魯迅』における文学者魯迅像と小田嶽夫の『魯迅伝』における愛国者魯迅像の相違を比較した。第一に、魯迅のテクストに対する小田の解読方法と竹内の解読方法が異なるということを指摘した。第二に、二人が描いた魯迅像にも相違が見られる。第三に、小田と竹内の魯迅像の相違は、両者の日本批判の差異やそれぞれの人格の相違と関わっていることを明らかにした。為政者に対して弱者である魯迅を描く竹内は英雄の魯迅を描く小田と比べて、民衆の生活に近づいているといえるだろう。

第三章では、日本の戦争中の竹内好と武田泰淳の交流を研究し、1940 年代における武田と竹内の関係を詳細に考察した。竹内と武田は同じ時期に、『魯迅』と『司馬遷』を通して、魯迅と司馬遷が人々を迫害し、殺害する為政者に出会って、不遇になることを書いた。魯迅と司馬遷は為政者からの圧迫を受けることによって、持続する絶望的な心持ちを持たざるを得ない。社会全体も進歩することができず、混乱状態に陥る状況の下で、魯迅と司馬遷は、自分の絶望

と社会の停滞、混乱、落後を描くことができるようになる。一方、戦中に、政権を握っていた為政者に対して弱い中国人を描く武田と竹内の行為は、中国のためという好意のみならず、日本の文化のためでもあった。武田と竹内は当時、対中戦争において優勢を保っていた日本人がどうあるべきかを考えており、戦争動員の国家の支配者の側、あるいは中国人を害する日本軍側の絶対的な強者の立場には立っていなかった。

第四章では、竹内好の浦和時代に彼が受けとめた日本文学に対する思考の流れを考察し、竹内の日本文学の再発見を研究した。竹内は戦時中において、日本国民の文学を構想していたが、それは天皇と日本政府によって支配された国家システムの下での臣民の文学である。浦和において、竹内は孤独の中で苦悶し、次第に政府と人民について考えていくようになり、後に日本のプロレタリア文学における進歩的な「勤労階級」の概念の下で人民を理解するようになった。しかし、中野重治の文学、特に転向期の中野文学と魯迅に出会った竹内は、中野文学において、素朴な人間像、反権威の意識、及び文壇文学のギルドへの抵抗を発見した。それを学んだ竹内は国民文学論争に積極的に関わった。

以上、竹内好が文学から出発し、文学を離れ、文学に戻り、最後に日本文学において、国民文学論を提唱する過程を見て取ることができた。その過程の中で、文壇作家を中心に考える文学観から、社会における民衆の日常生活を基礎とする文学観への変化が見られる。その点に関して、竹内の北京留学における峯子や車夫との出会い、魯迅文学との出会い、小田嶽夫との格闘、武田泰淳との交友及び中野重治に対する理解などが竹内に深い影響を与えたのであろう。

さらに重要なのは、日本文学と中国文学に対する竹内好の態度の変化である。竹内は当初、日本の文壇文学を高く評価する文学観を抱いて北京に入った。竹内の期待と当時の北京の文学の現実との間に大きな差異が存在していたために、竹内は絶望し、文学を放棄しようとした。その後の中国体験と魯迅研究を通して、民衆の日常生活を描く文学を高く評価する竹内好の文学観が形成されたと考えられる。しかし、戦時中の天皇制の下で統制された日本の国民文学や、戦後の日本のプロレタリア文学における「勤労階級」の文学などに直面していた竹内は文学を放棄しようとしなかった。それどころか、魯迅文学を高く評価していた竹内は日本文学の現状が魯迅文学に合わなかった時代において、日本文学の発展を見て感動し、心を動かされた。以上の竹内の思考の過程において、竹内の成長が見られるであろう。

日本文学に戻った竹内好が、国民文学論争の中で日本文学に対する期待を抱いていたことを紹介した。先行研究によると、竹内好の考える本格的な日本文学と竹内の国民文学論における最大の眼目は、文壇の解体であった。それを象徴するのは、『山びこ学校』であろう。『山びこ学校』の現実的意味は、戦後日本の社会教育の発展に大きな寄与をしたという点にある。竹内の文学観の価値が今後、さらに発見され、日本の社会に寄与すると筆者は期待している。